



小説 神楽陽子

挿絵 あいざわひろし

**立ち読み版**

R e s o r t 1  
いつでもコスプレ、バニーガール

R e s o r t 2  
男女交際は内緒のセックスから

R e s o r t 3  
バニーガールとセックスレックス

R e s o r t 4  
お仕置きタイム！ お嬢様ウサギの躰け方

R e s o r t 5  
ウサギさんたちのニンジンパーティー

## 登場人物紹介

Characters



くるすぎかたまき  
**来栖坂 環希**

良一のクラスメート。面倒見のいい性格で、運動神経抜群。成績も良い優等生。良一から告白されるが、返事は保留中？

にいざき  
**新咲 ともみ**

環希、良一の後輩。元気いっぱいであっちゃんのある女の子。

くずのみやゆかり  
**葛ノ宮 由香莉**

何かにつけて良一をライバル視する隣のクラスのお嬢様。自分勝手にワガママな性格。成績はあまり良くないが、生徒会長をつとめる。

すおうなづき  
**周防 渚**

由香莉の従者を務める、冷静沈着な少女。良一と同級生で生徒会書記。さっぱりとキツイ事を口にする性格で、弁論で右に出る者はいない。

ながせりょういち  
**長瀬 良一**

消極的な性格の少年。学校が夏休みに入ったので、叔母の経営するナイトバーでバイトすることにした。環希の事が好きだが、はっきりと気持ちを聞く事ができないでいる。

肥大化した亀頭も真っ赤に腫れあがって、とば口から先走り汁を漏らし、脈打ったたびにクンと雁首をのたうたせる。

「え？ 良一、も……もう脱いじゃったの？」

薄暗いせいではつきりとは見えないし、そもそも年頃の女の子にとっては、直視できるものではないのかもしれない。ムーディーなルームランプの向きを変えて、互いの股間に光が差し込むと、彼女だけさっと目を逸らしてしまう。

「ボクは脱いだよ。……あの、環希ちゃんは？」

「あたし？ ……あ、そうよね、あたしたち……今からエッチするんだもんね」

パニーガールは手探りで股布を、左脚の付け根へと寄せた。黒い光沢が妖艶なエナメルのボディスーツは、裸体をいやらしく飾るだけの衣装となり、肌の露出は煽情性を増して少年の胸を躍らせる。凹凸のない無毛の恥丘はすぐ下だ。

（あそこにオマ○コがあるんだよね。ドキドキしちゃって、もう）

それから環希は、頭の両隣でシートをぐいと握り締め、良一に念を押した。

「……いいわよ？ 良一。でも……見ないでして？」

「見ないで、って、それじゃどうするの？」

「あたしが場所教えるから。お願い良一……恥ずかしいの」

こちらも勃起を見られるのは抵抗がある。少年は頷いて、できるだけ彼女の股座を見ずに済むよう、先太のペニスを視界の外で構えた。別の生き物のようにのたうち、良一本人

も勃起ぶりに驚かされる。

（うわっ？ オチンチンがすぐビクビクいってる……）

網タイツの感触が強いパニーガールの両脚が、くるぶしを交差させ、少年の腰を羽交い絞めにする。折りたたまれた脚は小刻みに震えており、緊張の度合いが伝わってきた。

最初は玉袋で土手に乗り上げてしまふ。

「きゃっ？ り、良一？ 今、変なのが当たって……」

「ごご、ごめん！ もっと下？」

切れ込んだハイレグの右寄りを意識して、いきり勃つ肉柱を降下させていく。太腿と擦れるだけでも果てそうだ。睾丸で彼女の股間一帯を按摩し、入り口を探す。

見えない上に未経験では難しかった。

（うーんと……この辺かな）

イメージ通りの窪みではないが、湿り気の集中する箇所がある。そこだけ肌とは違う粘膜質がして、高熱を帯びている。撫でさする太腿と比べれば明らかだ。

「ようし、挿れるよ？ ……あつ、あれ？ えっと」

「違うったら良一、んふあ、行き過ぎちゃってる」

ところが今度は、押し込んだつもりが入らない。愛蜜で滑って、女穴を下に外れたらしかった。女のエキスは熱くて、想像以上に汁気が強く、ねばねばとする。

（なんかオシッコみたいだけど……）

これが女性の「濡れる」という生理なのだろうか。

「も、もつと上、もう……ちよつと、はあ、そ……そこ」

正確な位置を教えてもらって、疼いてならない肉棒を上昇させる。

先端を肉の花びらに迎え入れられた。

（え……？ どうなってるの？）

窄まる形にぬちちよりと濡れ、感触は唇に近い。さっきのキスの続きを、下半身でするように、良一は熱硬い勃起をそこに押し当て、慎重に体重を乗せていった。

……ズブッ！ズブ……ズブズブ、ズブ！

「ひあはああ!? は、入ってる……良一の、はあ、入ってきてる！」

パニーガールが蟹挟みの脚を引き攣らせ、ウサギの耳で円を描く。発作を起こし、過熱する肉体に玉の汗を流し始める。

「ほっホントだ、ボクのが環希ちゃんの中に……！」

敏感な剥き身のペニスを、頭頂から粘膜襞で包装される。挿入のまだ半分も終わらないうちに、良一は息を乱し、膣の締め付けに苦悶した。

（確かに入っては、いけそうだけど……すすすすぎすぎで！）

外気と一変して高温多湿の肉壺は、狭すぎて、男根では侵入できそうにない。擦過の際に閃く快感と痺れに躊躇し、引き返そうとする。心地よさを堪えるなど初めてだ。

しかし腰を引こうにも、環希の両脚が放してくれない。

「んふああ、ひあつ、あむうふう！」

網タイツで少年の脇腹をくすぐり、挿入を深くしていく。頭の中が瞬くような快感の連鎖に、良一も恥声を張り上げて、バニーガールの裸乳に掴まった。

「たっ、環希ちゃん？ ボクの何とか入って、っはあ！」

乳果に指を立て、谷間に情欲の涎を落とす。ふたり一緒に肉体の接合に悶絶し、途中で環希はウサギの耳を振りあげ、片目を伏せた。

「——あいくううッ!？」

痛そうに眉根を寄せ、わななく唇から数秒間声がなくなる。膣肉はずぶずぶとペニスを吸引し、膣圧を最大にして、ついに根元まで丸ごと呑み込んだ。

「環希ちゃん？ はあつ、や、やっぱり痛かったの？」

「はあ、す……少しだけ。ごめん良一、んあ、ち……ちよつとだけ休ませて」

どのタイミングで処女を奪ったのか、少年にはわからなかった。肝心の肉棒はびりびりに痺れてしまっており、感覚らしい感覚が働かない。そのために良一もセックスに小休止を入れたかった。互いに肩を上下させ、激しい動悸を競わせる。

「いいよ。ボクも、っ、つらくって」

汗だくのバニーガールは、シーツを掴み直し、涙を溜めた瞳で接合部をまっすぐに見詰めていた。痛かったに違いな彼女には申し訳なく思う。

「んふあ、はあ、んっは……良一の、んあ、入っちゃった……」

それでも良一は、異性と肉体を繋げる快楽に耽溺してしまふ。体温を汗濡れの肌で交換し、吐息で囁きあう密着状態、そのうえ生殖器官で脈を同調させる一体感。

頭の中を感動で満たし、肉路の締まりに酔いしれる。

(ボク、環希ちゃんとエッチ、セックスしてるんだ……！)

破瓜の痛みは幾分和らいだらしい環希が、恥じらいと嬉しさも相貌に浮かべた。

「すごい良一、お腹の奥まで届いて、はあ、良一のビクビクしてる」

「わかるの？ な、何だか恥ずかしいや」

ようやく感覚の戻ってきた肉棒は、膣内でさらに膨満していた。もはや鋼といつて差し支えない硬さで、感度も高く、カウパー腺液が尿道を通過するだけでも疼く。それらの反応はすべて相手に筒抜けだ。

(どうしよう、絶対やらしいカオになつてるのに、環希ちゃんに見られて)

好きな女の子のオマ○コに、チンポなどを突っ込んで、喘いでいるのだから、猛烈に恥ずかしい。彼女も少年の股座に秘壺で吸いつくような、あられもない開脚姿勢に、羞恥の感情を露にする。濡れ肉がキュッと茎胴を締め付けた。

「やだっ良一、カオも見ちゃダメ！」

「え？ つあくう！」

紅潮する顔を眺める間もなく、肉棒を駆け巡る電流に咽を詰まらせる。雁太を包む肉洞はぐつぐつと煮えて、茎根に口付けする壺口から、少年の玉袋に蜜を伝わらせた。

秘粘膜は巨根のサイズに薄く引き伸ばされ、亀頭冠の生え際にもみっちり肉贅を詰め込んでいる。このまま何もせずとも果てることも可能に違いなかった。

「環希ちゃん、あの……動かすよ？ くっ、んふあ！」

それでも自分のペニスを、彼女にもっと感じさせたくて、稚拙な抜き挿しを試みる。膣壁に追跡される肉竿をゆつくりと、愛蜜の沼底から引きずり出す。

ズプッ、ヌプヌプヌプ、ズチュンッ！

「あああん！ そ、そんな良一、はあ、いきなり」

反りあがった男根をスライドさせるのは難しく、環希の脚にも動きを制限された。だがわずかな摩擦でも生じれば、そこに甘い悦感が入り、ふたりの下半身に悦痺れをシンクロさせる。一度に与えられる刺激が強すぎるので、ひと擦りごとに休む。

「はあっ環希ちゃん、も、もう一回するよ？ あっあああ！」

「んあむふ！ んあっ、良一、りよおい、ひはああ！」

たまらず中断させてしまうくらいの快感だ。肉粘膜の中を泳ぐ亀頭は、焼け焦げたようにひりついて、無性にむず痒い。それに屈して肉柱を、前進もしくは後退させると、集束する贅に快楽神経を瞬く間に食い荒らされる。

「ああつく！ た、環希ちゃん！」

射精寸前の法悦は先端で持続し、爆ぜるのを待っていた。すでに良一の意志では肉体の官能をどうにもできない。肉杭を硬く押し込まれた環希も、網タイツを擦りあわせ、少年

に両脚でしがみついて悶え狂う。

「ああん！ つあん！ りよおいち、はあつ、そ！ そんなしちゃ！」

互いに感じやすい部分で刺激を交換する。オナニーなどでは味わえない、彼女の本物の喘ぎと、肌の温もり、穴からの汁の漏出が、セックスを実感させてくれた。

（気持ちいいよ、環希ちゃんとエッチ！）

胸震えを起こす身体を、折り曲げ、女の中心にピストンを送り込む。

ウサギの耳を固定してられないバニーガールは、羞恥と淫欲に上気し、玉の汗を肌を流していた。黒くて極薄のボディスーツは、ハイレグカットを斜めにずらし、少年の幹胴を股布で扱きもする。脇腹では網タイツがくすぐったい。

バストカップの裏から剥がれた生乳が揺れ弾んだ。

「やあんっ！ あたしだめ、こんなのすごすひてっんふああ！」

ただでさえ蠱惑的な悦よがり姿が、アダルトイックなナイトバーの衣装によって、危険な色香を濃厚に漂わせ、少年の理性を丸呑みにする。

「ひあつふ、っんあ！ やん、擦れて……おおっ、オマ○コ、溶けひゃう！」

最初は痛みによるものと区別のつかなかった表情は、瞳を蕩けさせ、姦通相手の男の子にうっとりとお惚れていた。桜の唇を台無しに拡げて、頬の熱を散らす。ストレートの髪を細身に巻き上げて、ウサギの耳を二本とも弧に揺らす。

「環希ちゃんのっ、オマ○コの中も！ 外も全部、き、気持ちいいよ！」

体型と比率的に見ても大きく実った、巨乳を揉みしだく手に力が入った。べたつく柔乳を先端から、指を輪にして掴み取り、体重をかけて圧迫する。数回ごとにしこった突起を摘んで、引つ張り、乳肉を捏ねまわす。

又チャッ、グチャ！ ズチュツ、又チャ！ ズチュ又チャッ！

「りよおいち！ はっ、激し……ああん！ おお、オッパイもいい、痺へる！」

攪拌棒は深めに嵌めて、抜いて挿す長さは三センチもない。張り出た雁太で最奥部だけを小刻みに連打した。ストロークにそれ以上の距離を持たせれば、すぐにも果ててしまいうさだ。まだもう少し環希を我が物に感じていたい。

（でっ、出る……出ちゃうのかな、女の子のオマ○コに……！）

子宮孔に口付けする龟头は我慢汁を溢れさせ、痛くなる寸前まで腫れていた。何がどう擦れているのか、神経が麻痺してよくわからない。ただひたすら肉棒の甘い痺れと、彼女の喘ぎを求めて、腰の運動を反復させる。頭の中は淫蕩のピンク一色だ。

「環希ちゃんっ！ はあ、環希ちゃん！」

「おくら！ おくつ、当たってるの、りよいひちのオチンチンきてるの！」

排精の導火線に火がついて、根茎の電圧を膨張させる。良一本人が直感するよりも先に身体じゅうが、欲望を吐き出すべく熱化し、恥汗を沸かす。

「ひあつふ、イっちゃう、ああつあたしイきそう！」

悩乱する環希も、台詞のついでに舌と涎を垂らし、肉悦に耽っていた。香汗の粘りつく

肉体が、バニースーツを脱がんばかりに腰を上下に波打たせ、少年の手にあまる巨乳を弾ませる。交差する脛脛ふくらはぎで良一を抱き寄せ、躍動感ある太腿を暴れさせる。

「ああんイク！ イクのりよおいちつ、あたし、もっ、もうイク！」

「ボクも！ ボクもイクつ、一緒に……はあつ、はあはあはあ！」  
衝動に駆られて良一は、矢継ぎ早に呼吸とピストンを加速させた。

欲望を肉穴に打ち込まれるバニーガールも、ストレートヘアごとシートを肩まで掴み寄せ、病的に喘ぎを速める。愛蜜を白濁させる肉花弁が、ギユツと窄まり、剛直を苛烈に食い締めた。高まる膣圧と愛液の濃度のせいか、猥音が叩くようなものに変わっていく。

パンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッパンッ！

「ひあはああつ！ ああ！ んつくう、ひはあ、ああつ、イツ、イクイクイク！」

彼女の最奥に怒張を当てるイメージが容易になり、腰が勝手に動く。電流が脳裏に火花を散らし、少年を初めての境地へと導く。肉襖のスープにペニスが甘く溶けた。

「ででつ出る！ れちやう、出てッ、あああああああああああああ！」

駆け抜けていく物理的な熱感に陶酔する。

どびゅっ！ びゆるっ、びゆくびゆく！ びゆるびゆるびゆる！

子宮に原液を注ぎ込まれる膣が収斂し、雁太を奥に引きずり込む。性器の合わせ目から愛蜜をブシュツとしぶかせて、環希も声高らかにいなないた。

「りよおいちイクツ、いつちやうううううううううううううううう——ッ！」



（すす、すごいポッキしてる！ どうなって？）

二枚の舌で削って造られるように、頭頂は凹んだ球の形に膨らんで、肉厚の傘を半円状に張り出した。良一本人、勃起の速度に信じられない。抗えない苦悶に襲われ、シーツを握った両手をわなわなとさせる。

「きゃ？ や、やだコレ……リョーイチの、さっきまでちっちゃかったのに」

少年の股間には似合わない肥大さと、雄渾な硬さで、美少女たちを驚かせる。特に由香莉は、男性の生理現象に目を瞬かせ、呆然とさえしていた。

「良一ったらもう、こんなにして……んむっぶああ」

ここで由香莉と差をつけたいとばかりに、環希が赤剥けた雁首にキスをして、ピンク色の性感帯へと舌を這い上がらせる。慌てて由香莉も、躊躇ためらい気味にリップマッサージ。舌の腹を龟头になすりつけてくる。

甘い電気の針がびりびりと刺さり、とば口から蜜が漏れた。

「あくううううッ！」

股座を彷徨っていた視線が勃起を上昇し、環希は羨望の、由香莉は戸惑いのまなざしで雁大を間近に見詰めてくる。見られるだけでも血流量が膨れ上がった。

（全然違うよ、ともみちゃんにしゃぶってもらった時と）

少しの刺激でも暴発しかねない。パニーガールの際どい見目姿に悩殺されて、本能が理性を圧倒し、良一もだんだんその気になってくる。

環希の差し出す舌が、敏感な亀頭表面にぴちゃぴちゃと口蜜を塗り固めた。

「これくらいになってからっあむ、本番よね？ 良一の男の子」

兔が人參をかじるイメージと重なり、冗談めいた質問をしてしまう。

「そ……そうだよ、ウサギさん。美味しい？ ボクの……はあつ、ニ、ニンジンは」  
恋人はぽつと頬を染めて、玉袋を掴み取り、懲らしめ程度に牽引した。

「このスケベ。……はいはい、美味しいわよ……んあふつ、良一のニンジン」

平らに広げた舌に涎を浮かせ、亀頭の右半分に垂らしていく。積極的に舐め、水飴の濃度の蜜を引く。すると、良一と環希の恋人気分を不愉快に思ったのか、遅れて由香莉も口奉仕を続行した。あたかも横槍を入れるかのように。

「ニンジンだなんて、変なコト……んつぶ、むふあ、少し苦いわ」

「はあ、由香莉ちゃん？ あつそこ！ そこもつと！」

指示をするのに相手を選ぶ余裕もない。舌が二枚では、摩擦の回数が段違いで、息継ぎさえ困難なのである。ともみの、バキュームの効いたフェラチオも気持ちよかったが。

（擦れるっ、ピンピンなとこに擦れてる！）

前の痺れが鎮まらないうちに次の痺れが始まる、快感の連鎖に喘ぎを禁じえない。良一はたまらずシートを掴みあげた。

「んくああああッ！」

剥き出しの快楽神経に、れるれると舌が絡みついて、亀頭の丸みとエラの返しを同時に

舐めたくられる。量多い唾液が湿った粘膜を張り、外気を寄せつけない。なめらかな舌は痛すぎることにない刺激を与えてくれた。勃起完了から一分と経たないうちに、ペニスは漏尿じみた牡蜜を先走らせ、感覚は熱せられたバターのように蕩けてしまう。

「良一の、んふ、またびぶクいつへる。ガマンできないの？」

「やだ、ホントに脈打ってる……っんあ、リョーイチも硬くって、熱くって……」

むず痒い部分には必ず、どちらかの舌が先まわり、小刻みに擦り立ててくれた。環希は頻繁に舌の裏表を返して、剛直と戯れ、逆に環希は数秒ごとに唇を離し、男根のあるべき姿を人差し指で吟味する。

淫らな昂りに正直な環希と、正直になれない由香莉の表情は、はっきりと違って、これが初体験のバニーガールの瞳は羞恥の涙に満たされていた。

どちらにも情欲をそそられ、少年も一時の肉悦に屈してしまう。

「っはあ！ 環希ちゃん、くう、由香莉ちゃんも……す、すごいよ、上手！」

暴れる心臓が肺を熱化させ、肌に恥汗を滲ませる。女の湿った吐息の二重奏にも、脳を揺らされ、快樂以外のことを考えてなどいられない。

(ウサギさんにボク、こんなエッチなこと！)

素肌の露出が大胆なバニーガールのフェラチオは、目にも扇情的であり、ルームランプの下に晒された胸元など、チョーカーを除いて丸裸だ。ウサギの耳の影が差す。

白磁のように照り返る美肌が広大なのは、胸のサイズが大きいからだろう。上の世代の

女性と比較しても、特大といえるたわわな果肉に、興味が湧いてくる。

承諾を得ることなく良一は環希、さらには由香莉のボディスーツまでずり降ろした。

「きゃあああっ!？」

柔房が飛び出し、巨大なプリンのように弾む。木苺に似た蕾が芽吹く豊乳は、しつとりと汗ばんで、重量感にも環希本人、手を滑らせた。頬を赤らめ、バストカップを戻そうとはするものの、布地が三角形に立たない。

「ちよつと良一、ずれたらコレ、着なおさなきゃいけないんだから」

「そうなの？ でもボク、今すぐ見たくって……」

脱衣に気付かず剛直を舐め続けていた由香莉が、生乳の開放感にはっとして、大急ぎで我が身をかき抱く。ウェーブヘアに隠れる横顔があつと赤面した。

「ウソでしょ？ いいっ、いきなり、な、なんてことするのよ、リョーイチ！」

「あつ、ごめん……っつい」

「っついじゃないわよ！ や、やだ……こんなの恥ずかしい」

ところが恥じらいながらも、ボディスーツの脇腹に親指を差し込んで、環希よりも綺麗にずらす。さらに妖艶な紫のバニーガールは、もぎ取るように巨乳を取り出し、小突起を隠す高さで指を編んだ。

「も、もう……これでいいんでしょう？」

「え？ そ、それはえつと……」

良一と環希が互いに目を合わせ、首を傾げる。

「言っとくけど、わ、わたくしのほうが環希のよりおつきいんだから」

自慢をするにしても、男子の前で乳房を晒すものだろうか。とうとう指も解いて、巨乳の全貌をルームランプの下に差し出す。捲れた薄布との境界線で、双乳が麓の丸さを強調し、蕾はやや上を向いていた。

（うわあ……由香莉ちゃんのおつきいよ。環希ちゃんのだってかなりあるのに）

Eカップの環希と並んでなお迫力があり、由香莉が自分の手を乗せられるほどだ。つい見比べてしまつて、感嘆していると、環希が對抗心を燃やす。

「あつあたしのほうが大きいわよ。由香莉、勝手なコト言わないで」

彼女も柔乳を自由に弾ませた。肉釣り鐘は、乳芽を小指の先くらいにしこらせ、刺激を待っているようでもある。夜遊びの相手が環希だけなら、すぐにも押し倒して、肉果実を揉むか、しゃぶるかしたかもしれない。

「環希ちゃんもおつきいってば。でも由香莉ちゃんが……」

ただし由香莉の同席に戸惑つて、脱がせる以上のことができない。

（続きとか、お願い……しちゃってもいいのかな）

その間も肉棒は、砲弾型の生乳を無防備に放り出したバニーガールたちに、我慢のならない疼きを漲らせた。環希がそれを優しく垂直に立て、亀頭に大玉の涎を追加する。

「ね、良一。考えてたのしてあげる。じつとしてて」

そして巨乳を前に転がし、剛健な肉柱を谷間で挟んでしまう。

「あっああ！ 環希ちゃん？」

「どう？ つんはあ、良一……：……気持ちいいでしょ」

触られるのでも舐められるのでも、膣に挿入するのでもない不思議な感触だ。自分の身体が一番硬い部分で感じるからこそ、乳果実はマシユマロのように柔らかい。

勃起そのもので直接、女の柔肌を味わえる大技に、良一は酔いしれて、献身的な恋人のストレートヘアをさらりと撫でた。

「すごいよ環希ちゃん、ボク、こんなの初めて……んはあっ!？」

ところがもう片方のバニーガールも、持ち前の巨乳を突進させて、環希のものと真正面からぶつかる。合計四個の乳塊は、無理に箱詰めされる饅頭のように密着し、少年の剛直を中央で苛烈に締め上げた。

「さっきからあなたたち、わたくしを無視してるんじゃないの？」

「そぞ、そんなこと！ それよりコレ、おお、オッパイに挟まってる！」

想像以上の圧力が一点集中する。弱点の肉根を捕獲された良一は、たまらずウサギの耳に掴まり、急な発作に陥った。柔乳の隙間に雁太が埋まっていく。

「ちよつと由香莉、んふあつ、はあ、邪魔しないで」

「いっ、いいでしょう？ んあつあ、わたくしが一緒にしても」

口蜜が潤滑油となり、環希か由香莉が身じろぐだけでも乳肌と擦れた。見た目とは裏腹

に、窄まりに幹胴を扱かれるような感覚がする。

又チャッ……又チュヌチュヌチュユ!

唇とも膺とも思える粘音を立て、何度も乳谷に沈むエラが、唾液の白泡をかきだす。茎胴の電圧が高くなり、高熱をもって尿道にカウパー腺液を浸透させた。

「環希ちゃん、ゆっ由香莉ちゃん! はあっ、も、もっとして!」

ぐいっとうサギの耳を引っ張り寄せ、バニーガールふたりの乳遊びに身悶える。

少年を責める優越を知ったらしい環希が、腕を引くように曲げて、巨乳の両端をむんずと驚掴んだ。指を食い込ませて、手首を返し、肉房を揉みしだく。本人にとつても相当の重さがあるに違いない、にもかかわらず。

「仕方ないわね。っんあ、ちゃんとあたしが、びゆるってさせてあげる」

器用に乳肉を捏ねまわし、しこった芽で太幹をくすぐりもする。ニップルの存在は乳圧にうねりをもたらし、肉棒への刺激に適度な変化をつけた。バニーガールは台詞のひとつひとつで、少年の本能を挑発し、巧みに獣欲もそそる。

「良一のって、硬くておつきい……あんっ、びりびりしちゃう」

黒のボディスーツをウエストまで剥がした、汗みずくの肉体は、男根から熱を得たように火照っていた。肌も吐息も芳しい牝の香りがして、淫蕩のムードへと誘われる。

「環希ちゃんのやあかくて、くうっボクの、んはああ!」

ウサギの耳を離れた良一の手は、ベッドに急降下し、引っ掻くようにしてシーツを握り

締めた。ベッドの上では牡も牝も、熱化する肉体を、沸く汗と汁糸の涎で濡らし、背中をくいと伸び上がらせる。ペニスと擦れる乳肌も上昇した。

「わたくしも、んくふう！ んあつ、わたくしだけ仲間ハズレなんて、もう」

由香莉が自慢の巨乳を寄せて、恋仲に存在を割り込ませてくる。そちらのパニーガールは肘を肩まであげて、シンバルでも鳴らすかのようにダイナミックな動きで、弾力豊かな柔房を押し揉んだ。谷間の瞬間的な最高圧力がリズムに乗り始める。

「あはああつ！ ど、どうかしら？ リョーイチ」

環希と同じ恥汗で肌を蒸らし、半脱ぎのボディスーツから色香をにおわせる。ねとつく肉房も、怒張を包む吐息も温かい。震える肩には、波のかかった夜空色のロングヘアを乗せ、豊満な肉体をなぞり降ろす。

（由香莉ちゃんウサギも、エッチかも……！）

濃紫色のボディスーツも、今は裸体を飾るアクセサリーだ。

良一のペニスが枷にならなければ、外れてしまいうそなくらい、ふたりの生乳は激しくぶつかりあった。悩乱する二匹のパニーガール。

「由香莉は、っはあ、後にすれば？ 今はあたしが良一と、あむ、してんの」

「わたくしの台詞、よ……んっ、んああ……！ リョーイチ、あつああ！」

性経験が皆無の由香莉は、どうしても快楽より羞恥が先行するのか、珍しい気弱な表情を涙ぐませ、弛みがちな朱唇を何度も結び直す。

対する環希は、はしたなく涎を垂らし、高まる乳悦に耽っている。

「あたし、の……んあつむ、ひはああ！」

肩を八の字に浮かせる双眸は、赤腫れの亀頭が乳谷を出ては引つ込むのを、ぼんやりと見詰め、舌なめずりの後は咽を鳴らした。肉釣り鐘を揉む回数を増やして、由香莉の双乳もろとも持ち上げ、剛直を按摩する。

（環希ちゃんも、由香莉ちゃんも、も……もうどつちも！）

互いにウサギの耳を交えて、由香莉も、豊乳の麓から半ばに五指を食い込ませる。

「わつわたく、わたくしのほうが、んふう！ おお、おつきいんだもの」

「あん、少しの差じゃない？ 由香莉は、ひあつ、さつさと離れて」

一つの大きな白餅を四つに断ち割ったように見える中央で、良一のペニスは泡立つ液にまみれ、ふくよかな巨乳のポリウムを満喫していた。

「いっどつちも！ 環希ちゃんのも由香莉ちゃんのも、ふあついいよお！」

茎根までみつちりと締め付けられる密封感、膣に通じるものがある。亀頭だけは、乳圧に呑み込まれては脱出し、角で女の涎をかき混ぜる。

又チャッ、又チュッグチャ！ グチュッ、又チャ又チュ又チャ！

尻が浮くくらい牽引される肉柱を、快楽電流に焼かれた。快楽から逃げ場はなく、少年は首を振って悩乱する。バニーガールも声のトーンをあげて。

「あああつ!? いいイクッ、ボク出るよ？ たつ環希ちゃん、もうボク！」



反対側の渚もマイペースではいられずに、乳果を下敷きにして倒れ、汗濡れの張りあるお尻と太腿を敏感そうに震わせる。

「そっちは、りっ、りょういひくん、おああっオシリです！」

シートヘアの端に覗く横顔は、頬に真っ赤な熱を溜め、涙で瞳を揺らめかせる。

しかし次第に拒絶をやめ、牝の本性を受け入れていくバニーガールの変化に、少年は胸を躍らせて、中指を螺子のごとくまわした。

「渚ちゃんよく聞いて、っはあ、ぬちよぬちよ言ってるよ？ オシリなのに」

「いっ言わないで、良一くんのイジワル……あくふうう！」

必死に快楽を食い止めようとする姿に、肛虐の意欲をそそられる。

(恥ずかしがってるよ、ともみちゃんも、渚ちゃんも)

単純に肉体を弄るのみならず、異性の感情まで思う通りにコントロールできた。

又チャ、又チャ！ 又チュ又チュ又チュ……！！

「あっあはああ！ りよおちゃんらめっ、オシリ、オシリにきひやうう！」

「だめですっ、捲れて……みっ見ないで、やあっ、んあああ！」

本人の意志とは無関係に、アナルは道を狭くして、異物をぐいぐい吸引する。あたかも膣穴のように、透明の蜜を滲ませ、指の移動を速くする。

奥にはまだまだ拡張の気配があり、中指を付け根まで埋めても届かなかった。

「こっちの穴でも、つくう、ニンジン食べられそうだね。どう？」

単調にならないよう捻りも加えて、菊皺を陥没させる。挿れた分を引き戻すと、肛門は三角錐の形に伸び、どこまでも追跡してきた。ともみは赤、渚は白のボディスーツで断ち割られた尻房は、ほの赤く染まり、無限の香汗を太腿の網タイツへと流す。

「もうっ良ー！ あはあん、ニンジン食べるのは、あんっ、あたしのこっちでしょ？」

「あああッ!? 環希ちゃん、い、いきなり激しすぎっ、んはああ！」

ペニスは肉襷を大量に絡みつかせ、熱痺を漲らせている。前の穴で悦よがるバニーガールは、腕を後ろで組んだまま、歩くように右脚、左脚を交互に前進後退させた。

ズチュッ、ズチャ！ グチャッ！ 又チュッズチャ！

「ああん気持ちいい、ニンジンもつと、もつとグリッてしたいの！」

舌なめずりの最中に涎の糸を垂らし、放り出した生乳をぬらつかせる。上下する柳腰は両脇にストリートヘアを従え、一定の間隔で波を打つ。

「環希ちゃん、はあっいいいよ、すぐくボクも！」

片方の太腿が少年のお腹に乗りあがるたび、肉棒を苛烈に搾られ、ひりつく亀頭の熱量が膨張した。快楽電流に男根がのたうちまわろうとも、みっちり食い締め、良一を快絶から逃がさない。互いに同調して発作を起こす。

「オマ○コなら、あふう、わたくしのもあるじゃない？ リョーイチ」

恋人と再び見詰めあう視界を塞がれた。由香莉が環希と向かいあって、少年の頭に餅肌のお太で跨がり、ピンク色の肉花卉を滴らせるのだ。自ら股布をのけて、秘裂を指で丁寧

に割り、口付けを求めてくる。

「由香莉ちゃん？ はあ……由香莉ちゃんのおマ○コ、とつてもいいニオイする」

舌に染みる愛蜜が甘酸っぱい。それだけ近くになれば、牝のにおいも濃くなり、男性を本能的に酔わせる芳しさにあっさりと酩酊した。

（ほんとにおマ○コも、オシリも、女の子って気持ちよすぎて……）

のぼせたような気分になってしまふ。脳裏には桃色の濃霧が充満し、あれこれと考えずに今はただ、目の前の悦楽を優先したい。

「リョーイチ、優しくして……あつ？ そ、そう……ああつそこなの！」

肉の花びらに鼻筋を磨かれた。まだ刺激らしい刺激を得ていない由香莉は、切なそうに腰をくねらせ、声色で甘えてくる。

「むあふつ、んぐう？ ゆはりひゃんのこころね、んぢゅう！」

少年はバニーガールの股座にかぶりついて、肉穴にフレンチキスを捻り込んだ。肉唇の隙間に隠れたクリトリスを集中的に舐め、蜜と涎をまとめて頬に垂れ流す。

「もつと、もつとしてリョーイチッ、ああああ！」

その頬を太腿で拭うバニーガールが、巨乳の重量に逆らって背を逸らし、ウェーブヘアの扇で空気を誘い込む。淫欲に屈服する令嬢の表情は見えずとも想像できた。

気高い瞳をとろんとさせて、はしたないとわかっているながら肉悦に耽ってしまう、葛藤のアクメ顔だ。たとえばそれが少年の勝手な妄想でも、興奮を増大させ、クンニリングスも

貪欲になる。舐めるのも吸うのも同時だ。

「ヂュルヂュル！ ズルッ、チュパ！ チュパッ、ヂュルルルル！」

「ひはああんっりョーイチ！ すごい上手、んはああああ！」

悦濁の中でも喘ぎ声を聞き分け、肛門の躰が足りないバニーガールも責め続けた。中指に人差し指も追加して、物量を倍化させ、小穴をこじ開ける。

「らめつりよおちゃん！ オシリがイっひゃう、ああんイっちやうよお！」

だめ、という割には小振りなヒップを寄せてくる、懸命なともみと。

「そんなに挿れたらっ、はあっイク？ イク……いっ、いいい、イきそうです！」

渚もアナルの悦びに目覚め、両手両膝を駆使して、汗みずくのお尻を運んでくる。灼熱の沼地と化した肉路の途中で、良一は二本の指を入れ替えるように捻り、抜いては挿して攪拌した。恥辱の穴でふたりをこのまま果てさせたい。

「んぷはっ、オシリでイこうね？ ともみちゃんと、はあっ、渚ちゃんは」

どちらの四つん這いもすでに崩れはしたものの、お尻だけは落とさずに支えている。

「りよおちゃんともみの！ んあっあともみのオシリ、痺れへるの！」

「あああっ良くん！ りょうい、ち……くふうん！ ああん！」

種類の区別がつかない蜜を、太腿へと枝分かれに流し、網タイツを蒸らせていく。

（これいいよ、たくさんの女の子と気持ちいい！）

また牝の芳香が一段と濃くなり、少年の脳をとろとろに溶かした。

「リョーイチもつと舐めて！ はっ、はあっあ、あああ！ イっちゃいそう！」

男の子の広げた舌に肉豆を乗せたバニーガールも、嬌声をあげ、絶頂までの全力疾走を他と競う。湧いてくる甘露はもはや白濁だ。

「あたしもっ！ あたひもニンジンらべてひく、はあっもうイクの！」

一本しかない剛直を独占する、セックス担当の環希は、ついには本物の兎のごとく跳ね出した。ウサギの耳を高速で揺らし、体重とお尻を浮かせては落とす。挿送音が小刻みになり、電圧最大のペニスは、根茎からやじり型の頭頂まで、全体を抜き抜かれた。

「すごいよ環希ちゃんっ、あく！ はあっはあ、ッはあ！」

擦れる性感帯で甘い痺れが連鎖し、大きな官能を紡ぐ。肉唇から吐き出される女の蜜は玉袋を伝い落ち、男の子が穿くショーツに染みだした。

ズチャッズチャッズチャッ——パンッパンッパン！ パンパンパンパン！

「ひはああッ！ 当たっへる、おっおく！ あんっおくまでひてる！」

愛欲と肉欲の接合に喘ぎ狂う女の子が、ストリートヘアを腰より高く翻して、ぬらつく巨乳を入れ違いに弾ませ、ボディスーツに隠れた臍で数字の8を描く。黒エナメルの光沢は波となり、縊れたハイレグカットに吸い込まれていく。

（環希ちゃん、ボクの環希ちゃん！）

見ているだけでも官能的な悩殺のダンスだ。愛する恋人の、隠すべきところを晒した痴態が、欲求よりも強迫的な衝動を駆りたてる。

「はあっボクもイク！ ミルク！ ミルク出ちゃう！」

臨界の快楽が始まり、膨満した亀頭に性急な搔痒感と、それを上まわる数の肉壁が殺到した。茎胴はより強く食い締められ、膣圧には一平方ミリたりとも隙間がない。ぴったりと吸いつく粘膜の渦が、多重の層を成し、肉棒全体を擦り立てる。

「イクの？ あんっ良一、あたしと！ あたしと一緒にイって、んああッ！」

使用中のバニーガールが、M字開脚で行進しながらお尻を上げ下げした。恥丘の裏側をエラでゴリゴリと穿り、外れかかつては、雁首から根元までを一度に呑み込む。一回の動作が大きすぎて、網タイツがずれてしまう。

「みんなもボクと、だよ？ はあっいいいよね？ ともみちゃん、渚ちゃん！」

右では小さな胸で突っ伏したともみも、良一の手首ごとお尻を振りまくっていた。栗色のおさげを広げた絨毯に頭を転がし、悩乱する。

「もおイっひゃうよおっ、お、オシリイク！ りよおちやあああん！」

左の渚は両手で尻谷を断ち割り、肛蜜を噴き零す。品行方正な彼女の美唇でも、この時ばかりはだらしなかった。

「ひはあああ！ りよおいひくん、そっ、これす！ もっとおねはいます！」

ふたりともお尻を強調する羞恥のポーズで悦がり、脚を三角に開いて、ボディスーツの股縁から雫を落とす。締めりの悪い蛇口のようにポタポタと。

「舐めて！ リョーイチ早くっ、あっんはああ！」

曲線のついた太腿を自ら抱え寄せる由香莉も、喘ぎを速め、火照った肉体の熱源を少年の唇に押し込んでくる。淫蕩の香りがますますきつくなつた。

「んもおおっ？ ゆあり、ひゃんっむぐ、んぐうもふ！」

洪水の中で息継ぎするように、がつついて、煮えた蜜をズルズルとすすつてやる。上では由香莉自慢の豊乳も、環希と鏡映しのように暴れた。

際どい格好のバニーガールを今夜は、一度に四人もはべらせて。

(みんなボクの、ボクだけの可愛いウサギ！)

恋人を抱きながら、他の女の子とも遊んでしまえる支配と独占に、良一は満悦する。

「ぷはあっ、ボクもうっ、はあ！ はあはあはあ！」

野生の動物と遜色ない貪欲さで、彼女たちも各々の快楽に耽つていた。色鮮やかな髪が乱れるのを、見下ろすように、ウサギの耳があちこちで傾いていく。

「あんっあたしイク！ イクッ、イクイクイク！」

赤子みたいに脚を広げる環希が、粘膜部分のストロークをひたすら加速させる。十分にたわめたバネを放すように、腰で大きく跳ねては、肉穴を急降下させた。

ズパンッパンッパンッ！ ズパンッパンッパンッパン！

ペニスで閃く快感が脊髓を突き抜け、より強い痺れに襲われる。

「もっもうだめ！ ボクもう出る、ミルクっ、ミルクミルクミルクミルク！」

肉体が一瞬、転落するような錯覚がした。法悦が視界を真っ白に瞬かせ、脳裏に火花を



「イクイクひく！ イクつオシリイつれますううううううッ！」

エクスタシーに共鳴する淫乱なバニーガールたち。

「ああああああああああああああああ——！」

ひとりにはセックスで、ひとりにはクンニで、ふたりはアナルで果て、全員が同じものに見惚れている。少年はまだ続く放精感に陶醉していた。

「き……気持ちいいよ……ウサギさんのオマ○コに、はあ……ミルク出すの！」

どびゅっ、どびゅっ、どびゅっ……どびゅどびゅどびゅ！

途中で射精が勢いを取り戻す。丸三日バニーガールに悶々とさせられた分が、溜まっていたのか。一対多数だからこそ、四人を相手にした分の量なのか。

「良一のミルク、んふっ、ミルクたふさん、たあくさん出れるの……！」

淫猥に笑み崩れる環希が、しどけない唇の両端に涎をぶらさげた。長睫毛に隠れそうな瞳はうっとりとして、嬉しそうにウサギの耳を躍らせる。

やがて全員が虚脱し、ともみと渚の尻穴から指が外れる。ふたりは絨毯に横たわり、由香莉も渚の側に転がった。もっとも長く絶頂状態にあっただらしい環希は、今回のセックスでは初めて両手を見せ、少年の胸肌を優しく、愛しそうにさすりまわす。

「はあ、はあ、あたし……良一、ちよっただけじっとして？」

それからゆっくりと腰を前にグラインドさせ、結合を解く。ずるりと白濁を引きずって現れたペニスは、挿入前とはまるで別物だ。指で掂げられた肉穴から、生温かいスベルマ



を追加で被り、ロウソクのような姿になっている。

「あんっ、いっぱい中出しされちゃった……」

跨ぐのをやめた環希は絨毯に腰を降ろし、膣内の精液を指でかき混ぜていた。

「環希ちゃんっば、見えちゃってるよ？ エッチなおマ○コ」

ようやく重力下に降りてこられた良一は、上半身だけ起こし、ペニス専用の出入り口となった彼女の股座をぶしつけに観察する。

それを、おさげのバニーガールが頭で割り込むように遮った。

「えへへ！ りよおちゃんのニンジン、いただきまあーふ……んもおお」

「あっ!? ま、待ってともみちゃん！ 出したばかりで、ああああ！」

白濁のぬめりを剥がすように、舌をのたくらせ、赤剥けた雁首を掃除する。余韻が冷めないうちの「お掃除フェア」に肉根が再び膨張する。

左からは渚も加わり、汚れた幹胴に舌をれるれろと這わせた。

「私もいいですか？ んちゅう……はあっぐ」

「ちよつとりヨーイチ、わたくしも！」

由香莉まで身を乗り出してくる。バニーガールたちの口淫欲は実に旺盛だ。

「わ、わかったから、っはあ！ みんなでしよう？」

良一は椅子に這い上がり、脚を最大に広げた。途端にウサギの耳が群がってくる。射精直後で刺激に弱い肉棒に、誰のものともわからない舌が滑り落ちた。

「りやおひゃん、ともみらキレイにひてあげるね。んれろえろ」

舌先で鈴口を穿るのはともみで。

「硬い……ンあつ、良一くんどうれすか？ んむお、ミルク絡まつひやうまふ」

つるんとした亀頭を右から丹念に舐めたくるのは渚。

「ここかしら、はあつ、舐めて欲しいところある？ リョーイチ」

左から傘を集中的に弾くのは由香莉だ。

「んもう、あたしのニンジンなのに……んもごつ、もおむお」

落下したウサギの耳は環希のものだったらしい。それでも玉袋を頬張って、サーピスを過剰なくらいに尽くしてくれた。

ヂュパッ！ チュルヂュル、ヂュプ！ チュポッ、ヂュプ、ヂュポ！

唇を窄ませて吸うのはともみ、這うように舐めるのは渚、小刻みなタッピングは由香莉のもの。かぶりつくのは環希の、それぞれが淫欲と求愛の奉仕である。四枚もの舌の波に揉まれて、ペニスの輪郭が明瞭になっていく。

「はあつ、はあ……あつ！ いい、す、すごくいいカンジ」

飼い主は遠慮なく椅子にもたれて、肉砲をうずうずさせた。剥き身に絡みつく生温かい粘液が、摩擦を伴って流動し、悦痺れを引き起こす。

「んぷあつ、はむ！ ……もぐっ、んぢゅう、あむ……おむつ、んもおお」

ヌヂュル！ ズルルッ、ヂュプ！ チュパッヂュパッヂュパッ！

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは、全巻の方向性でございませぬ。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



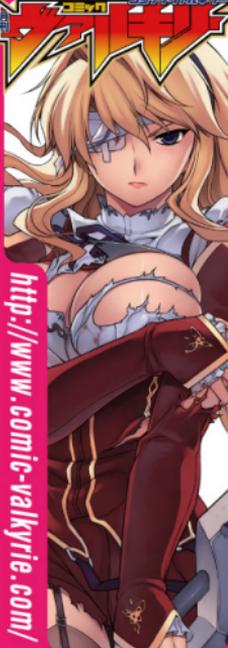
電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

**Valkyrie**



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!